日田市埋蔵文化財調査報告書 第19集

本　村　遺　跡

2000年

日田市教育委員会

例　　言

1．本書は丸善株式会社より委託を受けて日田市教育委員会が行った建売宅地分譲建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．発掘調査での遺構写真および遺構実測は吉田が行い、遺物実測・製図については行時が行った。
3．遺物写真は文化財写真家長谷川正美氏に撮影委託したものを使用した。
4．出土遺物や図面類はすべて日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
5．調査にあたっては丸善株式会社代表取締役三苫康之氏や地権者の（故）今井正信氏、諫本土地家屋調査事務所の方々に様々な御協力をいただいた。
6．本書の執筆、編集は行時が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　調査の経緯 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2
Ⅲ　調査の内容 …… 3
Ⅳ　まとめ …… 6

挿　図　目　次

第１図　調査区位置図（1/5,000） …… 1
第２図　遺跡周辺の主要遺跡分布図（1/20,000） …… 2
第３図　本村遺跡遺構配置図（1/150） …… 3
第４図　１号溝実測図（1/60） …… 4
第５図　１号掘立柱建物跡実測図（1/60） …… 5
第６図　本村遺跡出土土器実測図（1/3） …… 5

図　版　目　次

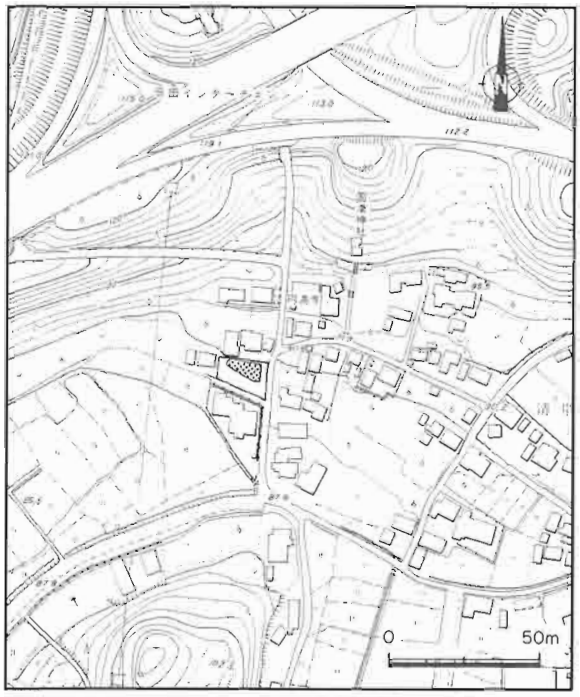
写真１　調査作業風景
図版１　（上　段）遺跡全景（東方向より）
　　（下段左）１号溝（南方向より）
　　（下段上）１号掘立柱建物跡（南方向より）
図版２　遺跡出土土器

Ⅰ．調査の経緯

平成11年4月23日付けで丸善株式会社より、日田市大字渡里字本村886-1番地に建売宅地分譲建設に先立つ埋蔵文化財の所在の有無についての照会文が日田市教育委員会に提出された。

この開発予定地は周知遺跡には該当していなかったが、この土地の周辺には国指定史跡の小迫辻原遺跡や弥生時代の首長墓などが発見された吹上遺跡などがあり、遺跡の存在する可能性が高かった。こうしたことから、開発事業者へ調査に対する協力を求め、その同意が得られたことから協議を行い試掘調査を実施することとなった。

試掘調査では柱穴や溝が検出され、さらに包含層からは中世の土師器や青磁片などが出土した。この結果をもとに今後の遺跡の取扱いについて協議を行い、事前の発掘調査を実施することで話がまとまった。



第１図　調査区位置図（1/5,000）

調査にあたっては事業予定地が全面盛土による工法であることから、①道路部分については全面調査の実施、②その他の盛土部分については確認調査にとどめることで合意に達し、平成11年6月14日に委託契約を締結し、平成11年6月15日より発掘調査を開始した。

調査では道路予定地から機械により表土除去作業を行い、その後遺構検出作業を進めていった。調査は、当初調査区全体に遺構の広がりを想定していたが、遺構の密度が薄かったことから、発掘調査は延べ2日間を費やしただけで終了した。

なお、調査の組織は以下のとおりである。

調 査 主 体　日田市教育委員会
調査責任者　加藤正俊(日田市教育長)
調 査 事 務　原田俊隆(文化課課長)、石井英信(同課長補佐兼文化財係長)、佐々木豊文(同主任)、美野寿美香(同臨時職員)
調　査　員　土居和幸、行時志郎、吉田博嗣(文化課主任)
調査作業員　行村　豊、行村ツマ子、行村シズエ、中尾タマエ、加納　健作、秋吉ミユキ、猪熊　忠孝、猪熊　ヨネ、高村笑美子、手嶋トシエ、穐本　文雄

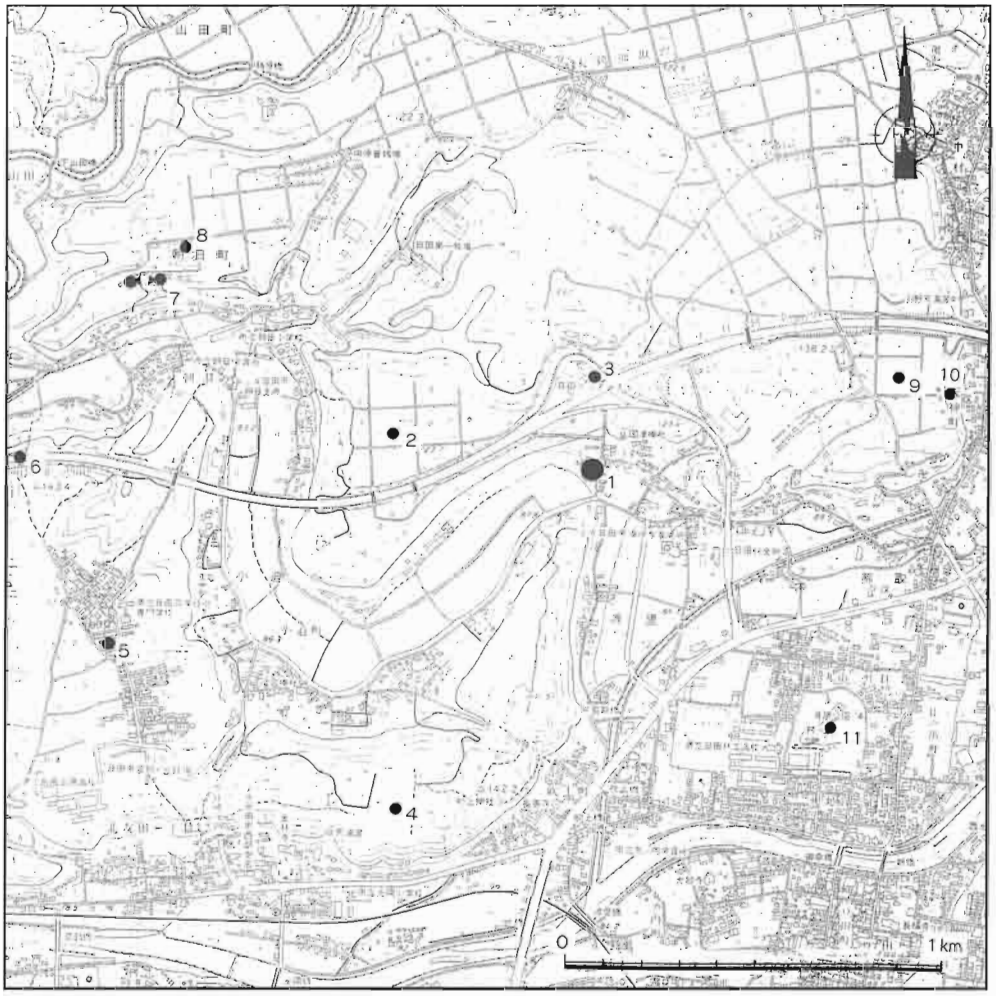
写真１　調査作業風景

II．遺跡の立地と環境

遺跡は日田盆地北部にある通称「辻原台地」の裾部に位置する。「辻原台地」では弥生時代終末の環濠集落や古墳時代初頭の方形環濠居館が発見され、奈良時代の大型掘立柱建物群、中世の溝で囲まれた掘立柱建物群なども調査されている小迫辻原遺跡が存在する。その南側に対峙する「吹上台地」には弥生時代の首長墓や環濠集落が発見された吹上遺跡があり、周辺にも草場第２遺跡や朝日宮ノ原遺跡、後迫遺跡、天満１・２号墳などといった著名な遺跡が密集しており、この地域は日田盆地でも屈指の遺跡地帯として知られている。

その二つの台地に挟まれた沖積地は、台地との比高差約30ｍを測る谷状の地形を呈し、台地の間を縫うように帯状に延びる。現在台地の裾部はおもに畑地として利用され、谷の中央では水田が営まれている。

近年高速大分自動車道日田インターの開通とともに、国道210号バイパスや市道熊取小迫線が建設されるなど道路網の整備が進み、遺跡のある東側では宅地造成やアパート建設などが急激に増加しており、日田市でも宅地化が目立つ地域の一つとなっている。



1　本村遺跡
2　小迫辻原遺跡
3　草場第２遺跡
4　吹上遺跡
5　朝日ヶ丘遺跡
6　小迫墳墓群
7　天満1･2号墳
8　朝日宮ノ原遺跡
9　後迫遺跡
10　羽野横穴墓群
11　月隈横穴墓群・丸山城跡

第２図　遺跡周辺の主要遺跡分布図（1/20,000）

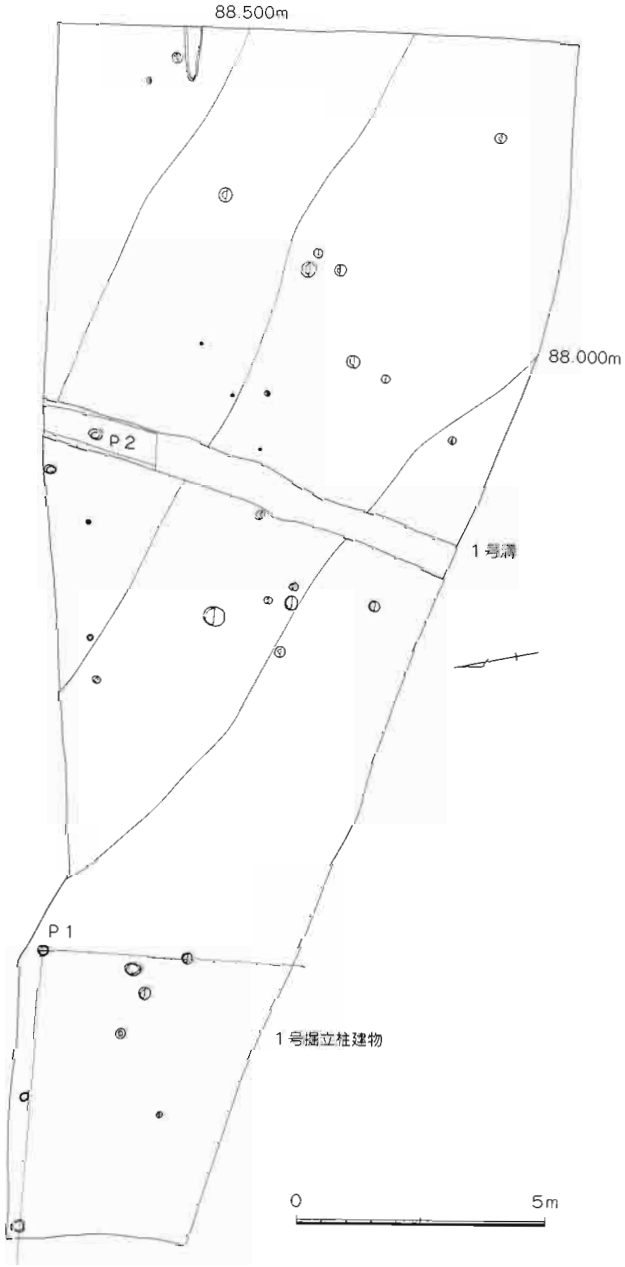
Ⅲ．調査の内容

本村遺跡の調査前の地形は、南側から西側に向かって緩やかに傾斜しており、その地形を利用して葡萄畑がつくられていた。その耕作土を除去すると、暗褐色で柔らかい中世の遺物を含んだ包含層があり、その下からは黄褐色の砂質性の強い地山面が検出された。発掘調査で発見された遺構群はすべてこの面で確認されており、表土からこの面までの深さは調査区東側で約0.5ｍ、西側で約1.2ｍを測る。遺構の掘り下げ作業を行った結果を見ると、柱穴や溝の残りは浅く後世にかなり削平を受けていたものとおもわれる。

調査では、調査区の中央付近を南北方向に縦断する溝が1条検出されたほかは少数ながら柱穴跡が検出された。これらの柱穴のうち調査区西端では、掘立柱建物跡が1棟検出されたが、それ以外の建物については不明である。

柱穴埋土中からの遺物の出土は1号掘立柱建物跡の中世期の土師質土器を除くとほとんどなく、また出土した遺物も小破片であり、時期を特定できる資料は乏しかった。ただ1号溝に切られた柱穴（P2）から出土した遺物は弥生時代後期の甕形土器の底部片（第6図5）であり、近くにその時期の遺構の存在も想定されるところである。

以下、各遺構ごとに説明を加えることにする。



第3図　本村遺跡遺構配置図（1/150）

１号溝（第４図）

調査区をやや斜めに南北方向に縦断する溝である。調査区内での現存長は約８ｍ、最大幅約80㎝、深さ約20㎝を測る。溝の断面は皿状となり底面はほぼ平坦となっている。溝の埋土は黒褐色で下層はやや砂質性が強い。埋土の中からは、須恵器や土師器の小破片が出土している。

１号溝出土土器（第６図）

１は須恵器坏蓋の胴部片である。色調は青灰色を呈している。２は須恵器甕の胴部であり、頸部に至る手前で欠損している。内面回転横ナデによる調整が見られる。色調は青灰色を呈している。

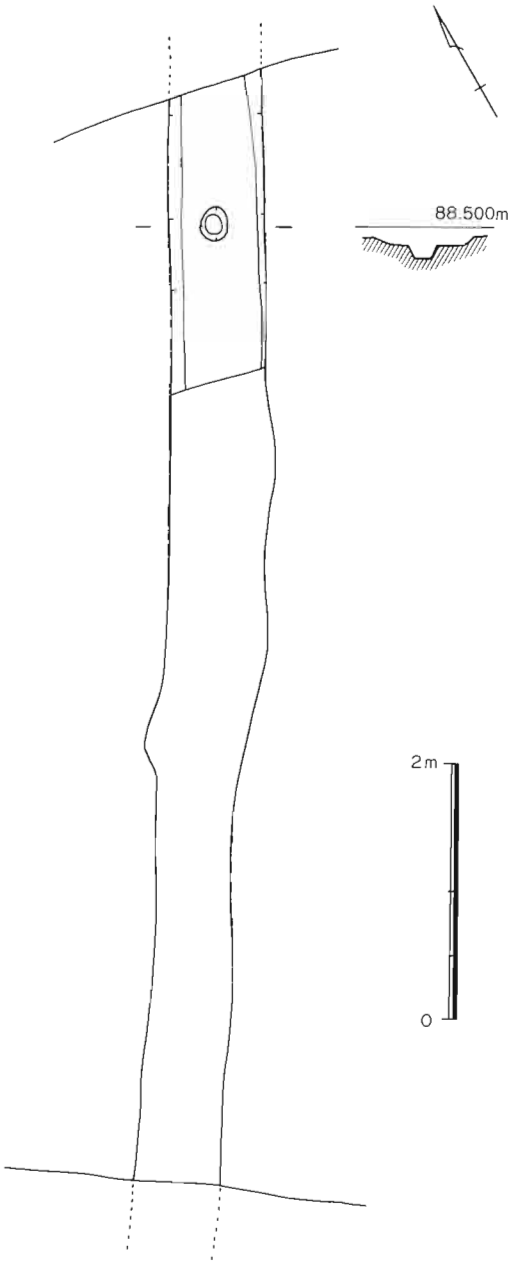
１号掘立柱建物跡（第５図）

調査区西端で検出された東西棟の掘立柱建物で、調査区外へ展開する。梁間２間、桁行２間以上で柱穴間の長さは梁方向で2.8ｍ、桁方向で2.6～2.9ｍを測る。柱穴の大きさは約20㎝で、深さは残存のよいもので約10㎝程度であった。柱穴の埋土は黒褐色で柱痕跡は確認できなかった。

出土遺物は、最も残りのよい建物東北隅の柱穴(P1)から土師質土器が破片ながら２点出土した。

１号掘立柱建物跡柱穴出土土器（第６図）

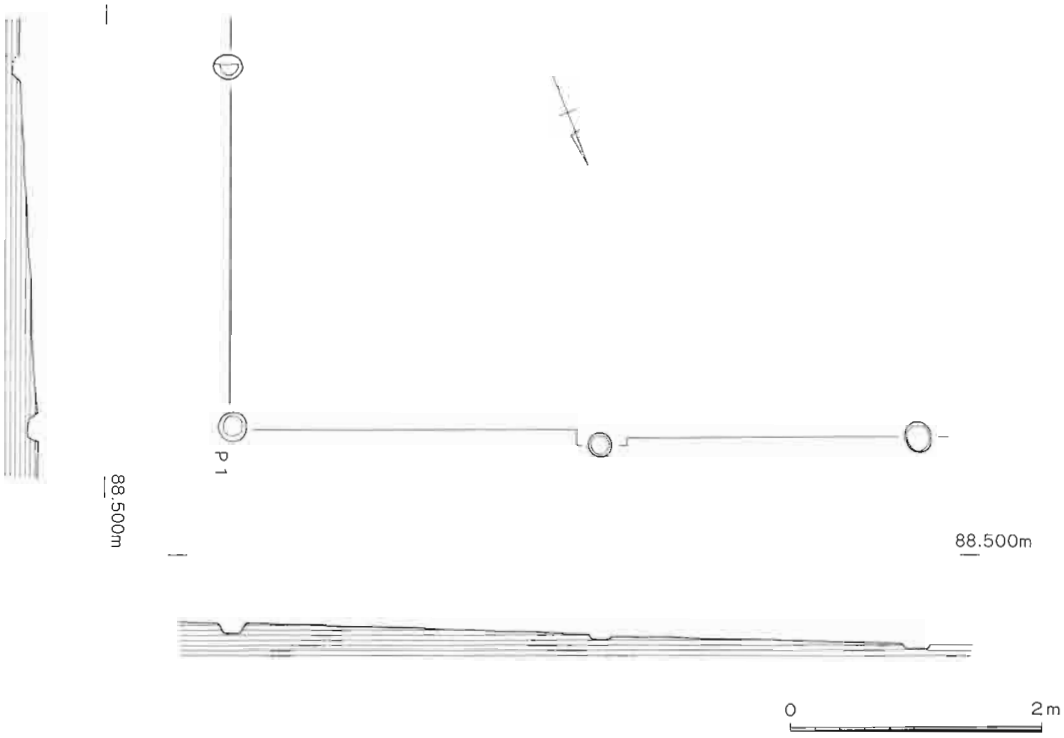
３・４は土師質土器坏である。３は復元口径12.8㎝、底径8.7㎝、器高3.1㎝を測る。全体のプロポーションは底部から口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がる。色調は淡茶褐色で、底部は糸切り痕が残る。胎土は石英、角閃石、長石、赤色粒を含み、焼成は良好である。外面は回転横ナデで凹凸が見られる。内面も横ナデであるが、内底面ではヘラによる器面調整の際に指でナデ消したと考えられる渦状の痕跡がみられた。４は３とは別個体である。色調は灰茶色で、胎土は３と同様である。



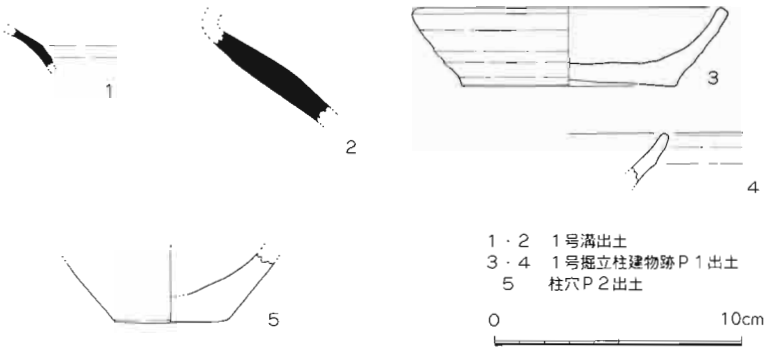
第４図　１号溝実測図（1/60）

柱穴出土土器（第６図）

５は１号溝底面より検出された柱穴(P2)から出土した甕の底部片である。底径4.6㎝を測る。底面はややレンズ状となり、ここから胴部にかけてはゆるやかに膨らむ。色調は暗茶褐色で、胎土は石英、長石、角閃石を含む。



第５図　１号掘立柱建物跡実測図（1/60）



第６図　本村遺跡出土土器実測図（1/3）

Ⅳ．まとめ

本遺跡からは、溝１条と掘立柱建物跡１棟が検出された。まずそれぞれの遺構から出土した遺物から、遺構の時期について検討していくことにする。

１号溝からは、少量ながら土器の小破片が出土したが、唯一時期を特定できる資料としては須恵器の坏蓋があげられる。坏蓋は天井部が高く、器形の特徴から古墳時代後期の所産と考えられる。調査区の隣接地を別の開発事業目的により今年度試掘調査を実施した結果では、２軒の竪穴住居跡が発見され、それに伴い７世紀代の高台付須恵器坏身などが出土しているが、その時期の遺構が周辺部に広がりを見せる状況を考えれば、溝の埋没時期はそれらとほぼ同時期と想定することができよう。

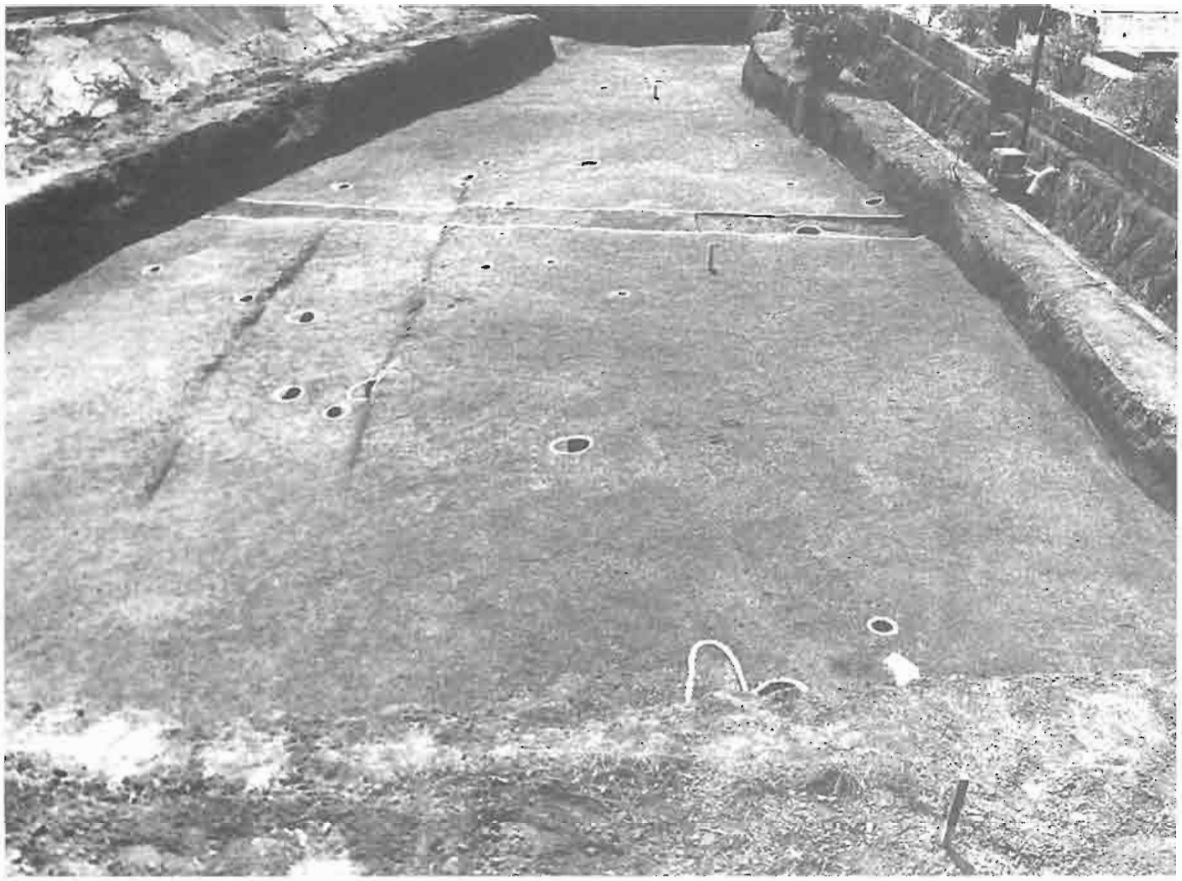
また掘立柱建物跡柱穴からは、土師質土器の坏が２点出土した。その器形や調整手法をみると、慈眼山遺跡（Ａ地区[1]）において、土壙２よりまとまって出土した田中氏分類の坏Ｂ１類に属する土師質土器に類似した特徴をもっていることがわかった。田中氏は層位関係の中で出現する土師質土器を大きく１期と２期に分けており、１期の上限を15世紀中頃とし、２期の下限を16世紀中頃として捉えている。坏Ｂ１類は１期の土師質土器の特徴とされており、したがってその年代観に則して当てはめると、15世紀後半以降16世紀前半代までの時期にあたると考えられる。

以上のことから、本村遺跡では少なくとも古墳時代と中世の２つの時期にわたって遺構の存在することが明らかとなった。このことはすぐ傍の小迫辻原遺跡を考える上で興味深い。それは小迫辻原遺跡では古墳時代前期から奈良時代に至るまでの間、集落が台地上に存在せず、その間の集落の動向についてはこれまで不明であったが、その在り方を考える上で新たな視点を得ることができたこと、さらに中世において溝で囲まれた掘立柱建物群を内包する屋敷地が台地上に存在する一方、台地の裾部にも同時期の集落の存在していた可能性が窺え、今後遺跡間の相互関係を台地と沖積地の双方から検討していくための端緒となったことである。

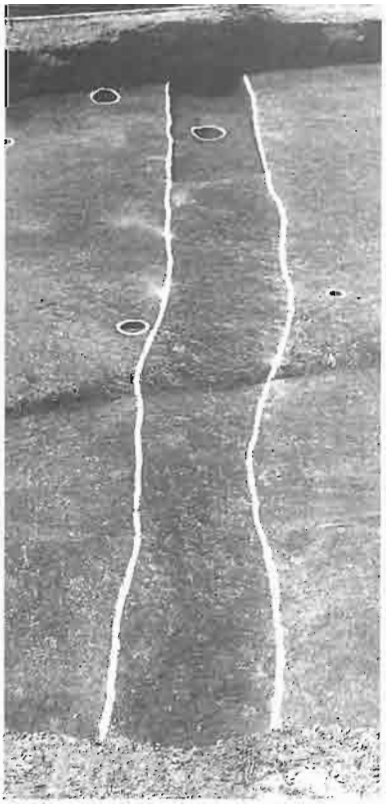
最後に、近年日田市内での開発は市街地から急速に周辺部にのびており、今後この地域の宅地化が予想されるだけに、本村遺跡の調査は今後の遺跡保護の対応を進めていく上でも大きな意味をもつとおもわれる。

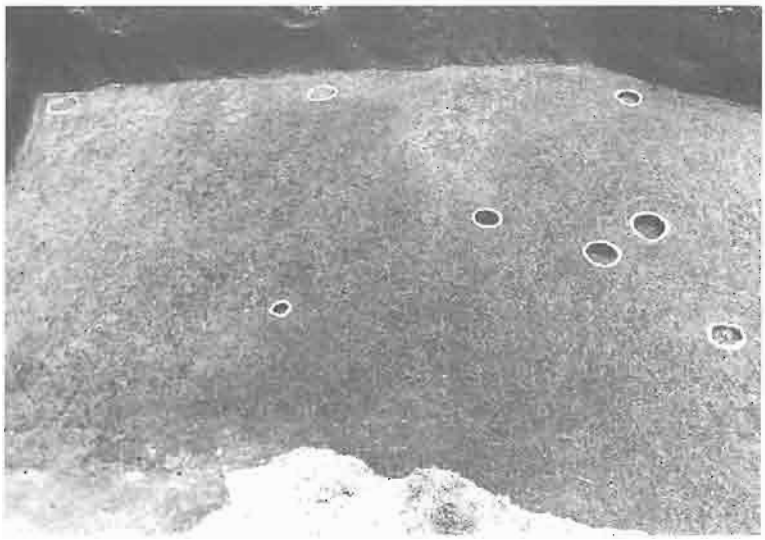
註１）田中裕介編『慈眼山遺跡（Ａ地区）』大分県文化財調査報告第85輯　大分県教育委員会　1991年

最後に調査にあたりまして、機械の手配や水の便など発掘調査に暖かくご協力くださった（故）今井正信氏の御冥福を心からお祈り申し上げます。（合掌）



遺跡全景（東方向より）



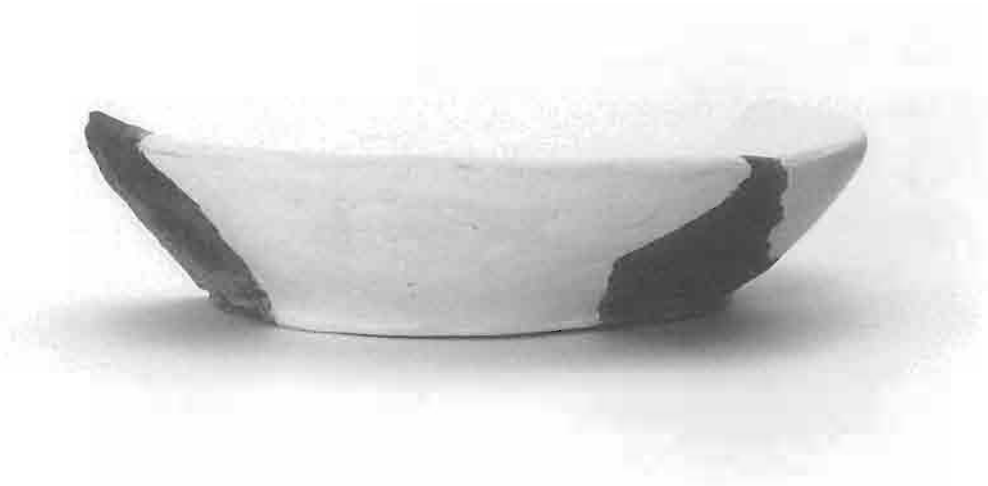


〈左〉１号溝（南方向より）
〈上〉１号掘立柱建物跡（南方向より）

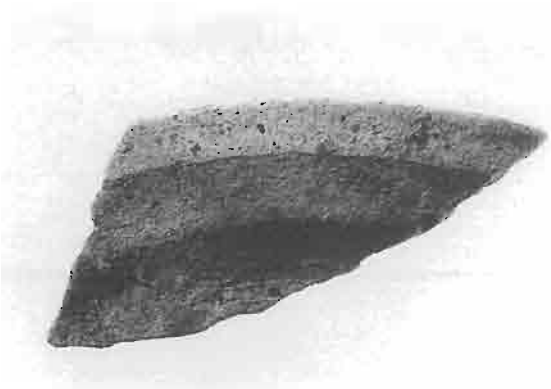
図版　2

1

2



3



4

5

１・２　１号溝出土
３・４　１号掘立柱建物跡Ｐ１出土
５　　柱穴Ｐ２出土

報告書抄録

フリガナ	ホンムライセキ
書名	本村遺跡
副書名	日田市埋蔵文化財調査報告書
巻次	第19集
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	行時志郎
編集機関	日田市教育委員会　(0973) 22－8232
所在地	大分県日田市田島２－６－１
発行年月日	西暦2000年３月17日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
本村（ホンムラ）	日田市（ヒタシ） 大字渡里（オオアザワタリ） 字本村（アザホンムラ） 886－１					1999. 6.15～ 6.16	200㎡	建売宅地 分譲建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本村		古墳 中世	溝　１条 掘立柱建物　１棟	須恵器 土師質土器	

本村遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書

第19集

平成12年３月17日

発行：日田市教育委員会
大分県日田市田島２丁目６－１
印刷：尾花印刷有限会社

本村遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第19集

２０００年

日田市教育委員会